
落ちこぼれなりの生き方

菅汰 茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちこぼれなりの生き方

【Nコード】

N1418V

【作者名】

菅汰 茜

【あらすじ】

日本国立武装魔術学園——そこは武術と魔術を学び、日々鍛錬する者たちを育成し闘技させる学園。周りからは『普通じゃない』で有名。

そこに在学する生徒全員は優秀で『武術と魔術を両立させている』というのが常識である、はずなのだが。

唯一、『魔術が使えない』少年。武神宗哉たけがみそうやは、学園の恥。落ちこぼれなどと周りからは見られ、罵り続けられてきた。中にはそうは思わない者もいるが……。

そんな彼がエリートのAクラスチームとの模擬戦闘で、学園中に衝撃を叩き出す！

「自慢じゃねえが、俺は仏より短気なんだよ」

普段やる気なしの宗哉。悪友の少年。活発な幼馴染。宗哉にベタ惚れな少女。カレー好きな先輩。

そんな彼らで構成されたチームが巻き起こす、波乱万丈・ぶっ飛びファンタジーアクション！

Battle. 0

ここは全生徒が朝・昼・晩の食事を取ったり、チームで会議などをする為に建設された食堂内。

この学園——日本国立武装魔術学園は日本の中心に建てられた学園である。

生徒数は約1000人を超える。その数を納める為にはおよそ普通^{ノーマル}教育科学校の体育館2つ分の広さは必要。故に広大だ。

そんな数の生徒がいることにより、常に食堂は騒々しいほどの賑いがある。

メニューを選ぶ者達。団体席に座っては雑談するだけの者達。予約の取り合いをする者達。

利用の仕方は様々ではあるが、ここまでは普通教育科の食堂とさほどの変わりはない。

だが、大きな違いはここからだ。……それは生徒達の格好。

黒を基調とし、赤いラインが入った制服一式。左胸には騎士をモチーフとしたエンブレムが付いている。

生徒1人ひとりが制服の上に鉄製の胸当てや鎧。頭には兜。腰には直剣や曲剣。背には弓や斧などを担いだ——あまりにも物騒な姿をしている。

一般人からすると信じられない光景だが。

……これが国立武装魔術学園で学ぶ者達の義務。

『普通じゃない』学園の由来。文字通りの？武装？だ。

極めつきは——

「醤油ラーメン一丁あがり！ B席の2番の子は手を振りな——」

「おばちゃん、こっちこっち！」

カウンターから大声で呼ぶエプロン姿の婦人。

それに反応し、少し離れた席に座っていた男子生徒が手を振るなりカウンターの方へ向く。

すると――

「あいよ！ 落とすんじゃないよ」

婦人はラーメンが入った丼に蓋をして――力いっぱい投げた。丼は綺麗な放物線を描きながら宙を飛ぶ。

だが、距離が全然足りない。除々に丼は床へと向かっていく。

男子生徒はそれを凝視した後、片手を突き出す。

その瞬間に丼は時が止まったかのように空中に留まった。

突き出した手を丼に集中させながら、微かだが少年は口を動かす。周りの音に紛れ、何を発してるのかはわからない。

手をゆっくり引くと、丼もゆっくりその生徒に向かっていった。

――この少年がやってみせた行為は世間でいう『手品』とはまた違う。

これがこの学園のもう1つの『普通じゃない』――

「……はあ、？ 魔術？ って本当に便利だなー」

さきほどもまでの光景を見ていた宗哉はテーブルに突っ伏す。

今はメニューが来るのを待っているところだ。

「おいおい、人に飯取らせに行かせといて何寝ようとしてんだよ」

「魔術使いてえと願いながら伏せてただけだ」

両手に盆を持って話かけて来る少年。宗哉は彼を悪友と称し、彼は宗哉を親友と呼ぶ。

彼の名は双葉龍貴。ふたば たつき

見ているこちらの目が疲れるほどの金色でカールがかった髪が良く目立つ。

ちなみに髪型や髪染め、生徒の姿などにこれといった規制はない。

「浮遊フロートが出来たって別に良い事ねえぞ？ 無駄に集中力いるし。ほらよ」

片方の盆を宗哉の前に置き、腰に提げた2本の刀をテーブルの横に掛け、席に座る。

宗哉は身を起こし、盆に乗ってる物を見た途端に目を輝かせた。

「おっ、大好物のからあげが入ったB定食じゃんか！ お前、これ

どうしたんだよ。Dクラスの俺達には豪勢過ぎるぞ」

「ふっ、こういう事もあるうかと、色々コネ使ってきたんだよ。食堂のおぼちゃんとはもう仲良しさ」

歯と親指をどうだとかばかりに輝かせて見せ付ける龍貴。

宗哉には眩しいぐらいのナイスガイに見えた……気がした。

——武装魔術学園では、生徒1人ひとりの強さや魔術をどれほど上手く操れるかでAかDまでのクラス分けをしている。……少々、授業態度や意欲も条件に入っているそうだが。

Aが最も強く・優秀の分類で、Dはその逆。全てが最低だ。

『強さこそ全て』がこの学園の校訓。

それに遵い、優劣による差別がある。……Dクラスは卵焼きと味噌汁に白いご飯が出れば良い方。

そして、今日の前にあるB定食は名の通り、Bクラス以上の者しか食せないメニュー。からあげやサラダにパスタ等が入っている。

……Dクラスの宗哉にとっては十分過ぎるほどに豪勢だ。

（ああ、こんなメニュー何年ぶりだろうか！生きてて良かったぜ）

「やっぱ、持つべきものは親友だよな」

宗哉は心の中で感激した後、箸を持つ。

さりげなく龍貴が悪友から親友にランクアップした。

「よせやい、今更。……ところで、よくこんな良い席取れたな」

2人が座っている所は、A席の団体用。あと3人分の空席がある。普段溢れかえるほどの生徒がいる中、こんなに空いてる席はそうはない。

……それに、周りには誰も近付こうとしない。この席を囲む様に円状の空白が出来ている。

「オレ達、誰も近付かないほど有名になったのか。悲しいな」

「いやーたぶん違うとは言いが……そこ、見てみ」

ため息を零す龍貴に宗哉は箸で指し示す。

その先には——『チーム英雄の雄叫び』《ヒーロー・ズロア》が予

約中』と書かれた1枚のプレートが置いてあった。

それを見た龍貴は心底から長いため息を吐く。

——この席に座った事が、この学園に衝撃を与える……ほんの序章だとは、誰も思いはしなかっただろう。

Battle. 1-1

宗哉達が座っているA席の団体用。突如、その周りだけ異常な沈黙が訪れた。

静寂な空間に響く足音。

瞬間。大勢の生徒達は一斉にA席までの道を開く。

「……あーあ、おいでなすったか」

金髪をぐしゃぐしゃに掻きながらうめく龍貴。

宗哉は盆に向けていた黒い瞳を開かれた道に移した。

3人の生徒が並んでこちらに向かってくる。

先頭を歩く巨軀な青年。その左右にはおかつぱ頭の少年と大きな三角帽子を被った少女。

少年は制服のみと腰に剣の軽装。少女も制服のみに、身の丈の半分ほどの杖を背負っている。

青年は高級な装飾が施されたコートを羽織っており、それによって武装が隠されていた。

3人は団体席に座る宗哉達を怪訝そうな顔で見ながら近付く。

宗哉は彼らの姿を確認し、また盆に視線を戻す。また瞳はから揚げに向けて輝いた。

……早く食べたくてしょうがない。

「君達はここで何をしているのかな？ よく見たらDクラスの、しかも学園の恥で有名な方ではないですか。それに落ちこぼれの連れも一緒とはこれまた……」

「ここは我ら英雄の雄叫び《ヒーロー・ズロア》が予約した席よ。あなた達が座っている場所じゃないの」

おかつぱ少年と少女が介入してくる。

「見りゃわかんذار？ 今から昼食をとるんだよ」

「これが目に見えないのか、落ちこぼれ共」

青年は低い声を発し、予約プレートを見せ付ける。

だが、宗哉はそれを見ずにただ盆から一切目を離さずにいた。興味がありませんよと言うかのように……。

「……あゝ、まあ、飯食うだけだからさ。もうちょっと待っててやってくれよ。な？」

龍貴は片手で「すいませんね」とジェスチャーしながら笑う。

だが、青年はまるで怒りが込み上がってるかのように表情を歪ませていた。

構わず宗哉は両手を合わせた。

そして――

「いただき――」

まず、と言う前に宗哉の顔面が皿と盆を碎き割れる音と共にテーブルに減り込み、無残にもから揚げ定食は潰れた。

後頭部には青年の握った拳が置かれていた。

コートから現れた1本の豪腕。……その腕で力いっぱい殴ったのだ。

周りはその光景を見てざわつく。

「？5本柱？になんか喧嘩売るから……」 「でもあんなすぐ手を出すか？ 普通」 「というか、生きてんの？」 等の声が観衆から聴こえる。

――『英雄の雄叫び』この学園におけるエリート、Aクラスのチーム。

その中でも？5本柱？と称されている学園内第3位。武術と魔術のどちらを取っても優秀な成績を持ち、このチームの名を知らない者はいないほど有名な集団である。

教師達などには一目置かれているが、生徒達には1つだけ悪い噂が流れていた。

――気に入らない相手には簡単に暴力を振るい、容赦なく危害を加えている、と。

この光景を見てはその噂も本当になりえそうだ。

「行くぞ」

「――待てよ、デカブツ」

「……何か言ったか？ クズ」

「聞こえなかったか？ 待てつったんだよ、デカブツ」

去ろうとした青年を龍貴は呼び止める。……左手には一振りの刀が握られていた。

青年は振り返り、龍貴と対峙した。

さきほどと同じく怒りによるものか、表情が歪み眉間には血管が浮かび上がる。

彼らの間、彼らを取り巻く周りの者達は糸を張り詰めた様な、そんな険悪な空気に包まれた。

「あんた等エリートが落ちこぼれたのクズだのって罵ろうが、そんなのオレは気にはしねえし、毎度の事だから笑って流してやるさ。

……けどよ」

持っていた刀を鞘から抜き取る。白銀の刀身、光り輝く。

そして――切っ先を青年に向けた。左右に立つ少年と少女は同時に身構える。

「さすがに手を出されて黙ってるほど、オレはお人好しじゃねえんだわ」

更に周りはざわつく。

龍貴と青年はお互い睨み合ったまま微動だにしない。

張り詰めた空気が徐々に場に沈黙をもたらしはじめた――その瞬間。

「そこまでよ！」

空間に陽気だが凜とした声が響いた。

観衆や左右の少年少女達は一斉に声ができる方を見る。それはさきほど開かれていた道。そこには1人の少女が腕を組んで仁王立ちしていた。

少女は決まったと言わんばかりに微笑むと、龍貴と青年の近くに歩み寄る。

「アンタら、こんな所でなに騒ぎ起こしてんのよ」

「よー『歩く危険』。今日も風紀乱してんのか？」

「だ、誰が歩く危険よ！ 誰が！ それにあたしは風紀委員よ！？」
風紀委員！ 乱してるんじゃない？ なくて取り締まってるの！」

これが目に入らないの！？ と大声をあげながら左腕に付けている『風紀』と書かれた腕章を見せ付けてきた。

龍貴はそれを見ずにはいはいと流す。

「ムキー！ 何よその態度は————！」

少女は顔を真っ赤にして地団駄を踏みながら、ただがむしやらに頭を降り始めた。

左右で結わっている茶色の髪の毛が乱れ揺れる。

ただ子供のような活発な声を発している様はまるで駄々をこねている子供みたいだ。……さきほどの凜とした声を出した主は一体どこへいったのか。

周りは突然の事にまるで付いて行けずただ茫然としていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1418v/>

落ちこぼれなりの生き方

2011年8月18日02時37分発行